



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	千葉燎郎, 『農産物市場問題の現段階』
Author(s)	飯澤, 理一郎
Citation	北海道農業経済研究, 3(2), 82-83
Issue Date	1994-04-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62942
Type	journal article
File Information	KJ00009064904.pdf



【書 評】

千葉燎郎『農産物市場問題の現段階』

飯澤 理一郎*

I

急激な「円高」と輸入自由化推進政策の下、農産物・食料輸入は急増を重ね、農産物の市場問題はかつてなかった程に激化してきている。止どまるところを知らない食料自給率の低下と各種農産物の「過剰」「生産調整」と価格の低迷が、そのことを如実に示していよう。昨年12月「合意」に達したガット・ウルグアイラウンドが、それに更に拍車をかけていくことは、今更指摘するまでもあるまい。こうした中で、日本農業をいかに再構成し、いかなる将来展望を描くかと言う点と係わって、農産物市場問題の解明がますます重要な結節点となってきている。

ここに紹介する千葉燎郎著『農産物市場問題の現段階』は、如上の問題を考えていく上での必読文献の一つと言える。本書は、著者が北海学園大学を定年退職されるのを機に、20年余に及ぶ農産物市場研究の成果を一冊に纏められたものである。その基礎視角は「農産物市場問題の現段階的性格を現代の国家独占資本主義体制そのものの危機の一表現ととらえるべきことを主張した」（刊行のことば）と述べられているように、「農産物市場問題への危機論的接近」にある。こうした視角から、本書は三部七論文一補論の構成がとられてい

る。それを示せば以下の通りである。

第I部 農産物市場問題への接近

農産物市場問題の現段階

現代農業構造分析の市場論的視角

わが国農産物市場をめぐる基本矛盾

第II部 農産物市場構造の分析

わが国における牛乳・乳製品過剰問題の特質

農産物市場における生鮮食料品の流通について

第III部 農産物市場政策の展開

農産物市場政策の機能と形態

農産物価格制度の現状と問題点

補論 小生産者市場—その展開と特質—

II

続いて、各部毎にやや詳しく、その内容を紹介していくことにしよう。

第I部第一論文「農産物市場問題の現段階」（1970年発表）は、本書のタイトルにもなっていることから解る通り、本書全体の中心的位置を占める章で、そこでは農産物市場研究の基礎視角＝「危機論的視角」が明確に打ち出されている。この「危機論的視角」の提示は「市場組織論と機能論との方法論的統一」（51頁）と述べられているように、同時にそれまでの農産物市場論研究の二つの系譜、すなわち、再生産論をベースに資本による「市場編制論」を展開した美土路達雄氏を中心とする系譜と、商業資本論を基礎に農産物市場の展開論理を捕らえた川村琢氏を中心とした系譜との方法論的統一をも企図したものである。さて、以上の視角の下、現下の農産物市場の諸矛盾が把握され、次いで諸矛盾の緩和策としての諸政策の展開が検討されている。そして、それにもかかわらずも国家独占資本主義の体制的危機の下では、「米過剰問題」の発現や“流通過程編制から生産過程編制に進まざるを得ないこと”（関連個別独占資本による「垂直的統合」、38頁）などに典型

*北海道大学農学部

的に見られるように、新たな矛盾を拡大再生産していかなざるを得ないとされている。

第二論文は、「再生産＝蓄積論的把握方法を出ていなかったために、矛盾がはらむ対抗関係の主体的論理を展開できていない」と言う第一論文の弱点を克服するために「対抗論的視点」を取り入れて、市場論的農業構造分析方法を試論的・箇条書き的に展開されたものである。下からの「市場形成」と言う概念が新たに設定され、地域農業を基礎とした地域経済の「再構成」論、それを通じての国民経済の「再構成」論が展望されるとともに、そうした分析を進めるためにも共同研究の重要性が指摘されている。第三論文は農産物市場をめぐる矛盾諸関係を世界的視野、特にアメリカとの関係を視野に入れて展開したもので、ガット12品目交渉、日米牛肉・オレンジ交渉決着後の1991年に執筆されたものである。12品目交渉と言い、牛肉・オレンジ交渉と言い、アメリカの意向が強く反映された交渉であったことは周知の事実であるが、それはこれまで「後景に退き、あたかも日本独占資本の『一つの敵』による支配であるかのように、たくみに隠蔽されてきた」（91頁）アメリカ帝国主義による対日支配が白日のもとに晒されてきた過程でもあった。そうした状況を踏まえて、自由化に伴い苦闘する農民の姿がフォローされるとともに、日本農業発展の展望が「真の平和と自主・自由を勝ち取る闘いの展開」（112頁）の中にあることが示されている。

続く第II部では牛乳・乳製品と生鮮食料品が取り上げられ、市場問題の具体的発現構造が解明されている。まず、第四論文（1981年）では、牛乳・乳製品の過剰問題が取り上げられ、それが膨大な乳製品の輸入と独占的な乳業加工資本主導の市場構造の下で、また政策金融に依拠した酪農の急激な規模拡大の結果「部門内部の需給調整機能を通じて過剰を解消するという循環性変動メカニズムが十分作用しえなく」（168頁）なった下で発現

していることが指摘されている。第五論文（1989年）では、市場開放の進展とそれに伴う「国内外の独占的資本企業による市場再編＝流通・加工・価格形成過程の支配・掌握」（173頁）の進展が、青果物、食肉、鶏卵を素材に展開されている。

第III部では、農産物市場政策の機能、形態などが取り扱われている。第六論文では世界史的視野から市場政策が取り上げられ、階級的・階層的諸矛盾の激化が矛盾調整策としての政策展開を必然化し、それがまた諸矛盾を深化させていくことが述べられ、第七論文ではわが国の農産物価格政策が分断的な四つの系に分けられており、その統一的体系化が必要なことが指摘されている。

III

以上、本書の内容を紹介してきた。紙幅の関係もあり、また筆者の浅学も手伝って、それを十分に示しえなかったと思えないし、更には有らぬ誤読をしてしまった恐れも無しとはいえない。

ところで、千葉市場論の心髄は農産物市場問題への「危機論的接近」にあり、その視角は本書の随所に現れている。「危機論的接近」は、ガット合意と農産物市場の全面的開放が間近に迫り、また農業後継者の絶望的不足と農地の荒廃、農業生産の後退が進む中で、ますます重要になってきていると思われる。それらの事態はわが国の国独資体制の危機が一段と深化したことの現れの一つと考えられるからである。また、実践的な問題意識を強く持ち、農産物市場論の体系化、更には農業市場の体系化に絶えず腐心してこられた千葉先生の姿勢には大いに感服せざるを得ない。

幅広い関係者に一読を、強くお勧めしたい。